

イデオロギーという言葉をご存じだろうか。単純な意味では哲学や宗教等の観念形態を指し示している言葉だ。しかし、より詳しく知ろうとするとトラシーの観念学の原理を始めとして、有名なナポレオンやマルクス主義等が出しやばり、複雑怪奇な横文字となってしまう。知ろうとすればするほど本質が分からなくなってしまう、そんな言葉の一つだ。

そしてその本質を見失い、ただ言葉だけを掲げては満足する団体があった。

——A riot of Ideology ライオット・イデオロギー。

なんて軽い文字列であろうか。英語の横に片仮名で書いてある辺り、幼稚さも感じる。「A」と「of」は何処に行ったのか。そもそもイデオロギーという言葉を自分達の団体名に用いるという浅ましき。又、この団体がただの高校の部活動なのだから驚きだ。一方で、何部で創設されたのが非常に気になる。浮ついた名前なだけなのに、何故自分がこんなに気になっているかが理解不能だ。

だから私は正々堂々と乗りこもうと思う。高校一年の春、部活探し中の私が挑んでやろうじゃないか。

結論から言うと、廃部寸前だった。まず室内に二人しかいなかった。部員二人とか部活動を舐めているのだろうか。又、悲しい事にその内の一人は顧問だった。

「今日は偶々集まりが悪いだけで、普段ならもうちよつといふのよ」

カーテンを閉め切った仄暗い空間に、パイプ椅子が六脚と長机が三台。室内は大量に積み重ねられた本と段ボール箱が所狭しと並んで息苦しさを感じる。外から聴こえる健全な部活動勧誘の音がどこか遠い世界の出来事のように感じるほどの閉鎖空間。そこに顧問と部員一名。この調子だと部活動の最低人数を下回っている。そうだ。潰れるのも時間の問題だろう。

「他の部活動は部員勧誘で忙しいのに、この閑古鳥ですか」

「目上の人に対して何たる言い草。ああ、これが生粋の不良生徒なのね。でもここに来たからには矯正してみせる。だから荒波に負けないで！」

大仰に反応したのは顧問である若い女性だった。結構な美人で、ふわふわと浮いた髪の毛に、年下の男の子を柔らかくたしなめる口調。創作物でしか居そうにない希少価値の美人教師に告白する生徒も少なくないだろう。但し、性格はどうやら残念そうだ。

何故こんな怪しい部活動の顧問をしているのかも気になるが、先に用件を済ませよう。

「そんな軽い悲壮感と使命感はさておき」

「スルーした！」

「……それで、ここは何をする場所なのでしょう？ 失礼ですが、こんな部活名では流石に誰も来ないんじゃない？」

「そもそもここは創作研究会なのよ。漫研とかは本気で漫画を描いていて忙しいそうだし、文芸部は近代日本文学を掲げて活動している。ここはその溢れ者同士で最近の創作物をひもといひて学んでいく、その為に

作られた部活動よ」

入口には例の言葉しか書かれていなかった。他の名称がどこかに書かれていないか探したが見つからな  
いが故に、あれが部活名だと思い込んでいた。

「それではライオット・イデオロギーって言葉は一体どこから？」

「ごめんなさいね、あの子が勝手に入口に貼ったのよ。何度止めても結局貼りに行くし、まあいいかっ  
て放置していたの」

顧問は本当に申し訳なさそうに、頭を下げる。たかが一生徒にここまでするなんて、正直驚いたし、逆  
に怖かった。

尤も、怖さの原因は顧問だけではなく、その後ろでずっと睨みつけてくる女子にもあった。肌はきめ細  
かく、病的なほどに白い。小さい顔に似合わずの大きな目が、まるで領土侵犯した敵を見るかのようにこ  
ちらに目を向けていた。黒目がこちらの弱点を見抜き、丸ごと呑み込むかのような錯覚。

その錯覚に負けてたまるかと挑戦的に睨み返す。元々こちらは一言物申しに来ているのだ。視線だけで  
やられるほどやわじやない。

「人の眼を見て話しなさいって義務教育で習わなかったのかしら。……これは高校で直さないと、就職の  
際に相手に悪い印象を与えてしまう！ 頑張っ  
て矯正してみせるから、寒波に負けないで！」

「ゆきちゃん、ちよつと黙って。私はこの人と戦っているの」

薄紅色の口から発せられたのは静かな怒り、戦争宣言だった。顧問のゆきちゃんは叱られた子犬のよう  
にしゅんとして椅子に座った。

「ヒエラルヒーは君の方が上なんだな」

「粗さがしするクレーマーは好きじゃないの」

きつと顧問には二人の間で火花が散ったように見えたのだろう。「ほ、ほどほどにね」と教職者としてはあるまじき放任を選択した。

「ふうん、ライオット・イデオロギーとかよく分かりもしないでイデオロギーを掲げている人がクレーマー処理とはね」

「理解しようとしてもしないで文句を言ってくる辺り、本当にはた迷惑なクレーマーね」

「買い言葉に売り言葉。初対面とは思えないほどの会話量だと思う。」

「だってそうだろう？ イデオロギーと言っても色んな意味がある。多義な言葉を一用法のみで扱っている。そんな君が、顧問の言葉を無視して入口に貼っているんだ。クレーマーじゃなくても気になっちゃおうさ」

「私のイデオロギーは世界的に、政治的に、闘争的に用いている。——主に現状日本には飽き飽きしているの。全てを規制すればいい、全て責任を投げつければいい。貴方のように取り敢えず批判しとけばいい」という惰性的思考に私は異議を唱えたく掲げた」

「異議を唱える手段がライオット——暴動を起こす事か。こりや傑作。混乱を望み、取り敢えず現状さえ壊れてしまえばいい。そんな浅はかな考えでは君の嫌っている輩と大差ないさ」

「……暴動を起こせるまでの労力を知らない現代っ子の言葉ね。イデオロギーは自身に都合よく偽証、改変をしてしまう先入観でもある。だからこそ私は他者に対して、そして自己に対してもライオットしていいのよ。それに貴方はライオットを一つの意味だけしか捉えていない。……こりや傑作ね。そんな浅はか

な言葉では貴方を嫌っている輩に勝てないわ」

後半の言葉はねちっこく、さらにこちらの物言いを真似しての嫌味をかましてくる。それに現代っ子っ  
て言われたが、言った本人は学年が一つしか違っていない。組章を見ればすぐにわかる。

ここで問題なのは、ライオットの他の用法を知らない事だ。入学したての高校一年生なのだからむしろ  
暴動という意味が分かったただけ褒められるべきだと思っただけだ。現状が打破できない以上、褒めるところ  
か自分の努力不足を怒るべきだ。その意味を尋ねる権利は勿論あるが、こんな可愛げのない奴から学ばさ  
れるというのは屈辱だ。臥薪嘗胆すらしたくない。

どうやら切り口を変えるしか手段がないようだ。

「そんな大層な意味をお持ちとは思いませんでした。では何故、こんな寂れて今にも潰れそうな一部活で  
その言葉を掲げているのでしょうか？」

切り口を変える。それは核心へと突く鋭い言葉を投げかける事だった。相手の理念は少なくとも簡単に  
揺らぐものではなさそうだ。ここまでの『言い訳』を用意しているのだから。ならば言い訳を突破する方  
法を取るしかない。

——どんな言い訳をしようと核心を虚飾してはいけない。特にこの手の人間ならプライドも高いであろ  
う。

「……」

案の定、直ぐに言葉は来なかった。当然だ、核心は決まりの言葉。核心を言う事で、相手を認めさせな  
くてはならない。伝え方もそれなりに工夫する必要がある。

しかし、ゆっくりと冷静に思考しているその姿は嫌いじゃない。先程まではドッジボールのように言葉をぶつけ合っていたが、このように思考する冷静さも持ち合わせていた事が新鮮だった。

一方で、こちらは一種の充足感を覚えていた。ライオットの意味がわからないという欠点はあったが、それを忘れてしまうほどの満足感や相手の黙る時間が長いほど膨れ上がっていった。しかし、それは相手の畏だったと後々に思い知らされてしまう。

「——イデオロギーというのは、私達の中で常に存在しているもの。高校生という若き中でも、揺らぎながらも存在している。だからこそ色々なものに触れてほしい。本、テレビ、インターネットからも感じる事は多々ある。しかし、それ以上に人から感じるイデオロギーは最も大切に考えるべきもの。ここに所属している人は全員、とても一般的ではないイデオロギーを持っている変人の集まり。ちっぽけな部活だけど、ここで学び得る事は大事なものになると思うの。難攻不落な多様性に触れる事は非常に面白い事よ。特に私と同じような貴方であるならね」

「……だからって、暴動はさすがにないんじゃないですかね。だって若さ故の暴動であつたとしても生産性は感じられません。たかが一部活では無理ですよ」

ああ、自分の優位性は崩れた。がらがらと崩れる音は遠くから聞こえるが、それ以上に新たな音を感じ始めていた。

たとえば、それは同類に会えたという喜び。中学生までは言葉一つでここまで熱く語りあつた事はなかった。せいぜい、辞書やインターネットで調べればわかる問いかけぐらいだ。こういった抽象的な事柄に對して語りあつた事はなかった。

たとえば、それは自分の弱さ。最後の最後で詰めが甘くなつた自分は負けだと認めてしまい、思わず敬語で話してしまった。それでも悔しさは少しだけで、自分はまだ成長できるのかという当たり前な事に喜んでいた。

そして、最後で焦つたような口調で応対してしまつた原因。

——それは彼女の笑顔だつた。

最初は睨みを利かせていて可愛くない奴だなと思つていた。言葉を投げかけるその熱心さを感じながらも、やはり怒りの方が勝つていた。しかし、疲れた顔でありながらどこか清々しく、それでいて誇らしく浮かべる彼女の笑顔で全て吹き飛んでしまつた。これだから異性はずるいのだ。異性だつて認識してしまつたら、思春期真っ盛りな高校生はイチコロだろうに。

彼女はこちらの言葉を柔らかい笑みに変えて答えた。

「だから私の為に、君の為にちっぽけな部活で大きな夢を追いかけてみない？」

夢ときた。この笑顔に夢とは卑怯なものだ。言い終つた後、恥ずかしそうに赤く染まる頬も卑怯だ。これでは若さ故に暴動でもなんでも挑戦したくなつてしまふ。飄々として大人ぶつた自分を引きずりおろして、子供みたいに夢を追うのも悪くない。そう思つた時点で負けから完敗に降格だ。

夢見た負け犬は大人しく部活に入る事にしよう。この創作研究会に……うん？

「あれ、でもここつてただの創作研究会じゃないか？」

「「ぎくっ」」

「おい、なんだその古典的な反応は。しかも、ちやつかりと顧問も口に出して反応しているし」

彼女の笑顔がピシりと固まり、何故か汗までかいていた。肌寒い四月で汗をかきながら、同様に焦った顧問とアイコンタクトを交わしている。良い話で纏まりそうだったのに、これから始まりそうな茶番劇は一体なんなのか。責任は気付いたこちらにもあるが。

「そう言えばさつき『ただの』とかも言っていたわね。『ただの』や『たかが』って言葉はその価値を理解しようとしなくて切り捨てる稚拙な言葉よ。貴方にとっては価値がなくて他の人にとっても等しく価値がないって断言できる人だけ使いなさい。結局不満を与えるだけだけどね」

「おい、いきなり年上口調になって何を言い出すんだ。額面はそれなりにカッコいいが、泳いだ視線で全て台無しだぞ」

何故出会った時、あの目に見つめられただけで動けなかったのだろうか。今じゃあたふたとしながら、こちらの様子を窺うまでに堕ちているじゃないか。

「そ、そっちだって物凄く下手に出てドヤ顔決め台詞言っていたじゃない！」

「はいはい、それじゃ入部届け出して」

「あ、うん」

再生紙の入部届けに記入事項を全て埋めてその場で顧問に提出した。

「先生、頑張るから！ さつき誓い合った若き夢の為に、まずは入部届けの紙を再生紙から卒業させる！ だから苦難に負けないで！」

相変わらずおかしな方向性で使命感を感じていた顧問をスルーして、今日は帰る事にした。

もしあの場に居続けたなら入部する気になった理由を聞かれるだろう。

その理由を、お前の笑顔に惚れたからだなんて言える訳が無い。こちらにも言い訳する時間は必要だ。聞かれた時の為に、一発逆転の言葉を捻り出しておこう。そう意気込んで、帰路へ就いた。

——A riot of Ideology: 観念形態の迸り、奔放。

成程、単に片仮名で書いたのではなく別の意味合いを持たせる。何とも彼女らしい創作。では、この英語と片仮名の意味、そして夢を深く考えてみようか。

## あとがき

ちよつと横に長めなあとがきですので、メモ帳を横に伸ばした方が読み易いですよ。加えて、筆者の自己考察（という名の言い訳タイム）が書かれています。本文未読の方は先に本文をお読みください。

因みに本文の字数は表題含めて5000字となっております。

本文2P目の『ひもといて』を『繙いて』にしようとしたけど、読みにくいかなと思って『紐解いて』にしようかなと考えてみた。

でもそれだと意味が変わるしどうしようかなと思って結局平仮名にしてみました……え、どうでもいいって？ Exactly（その通りです）。どうもアイロン(einrotte)です。

拙作をお読み頂きありがとうございます。どうもアイロン(einrotte)です。テーマが『夢』という事で、半ば無意識に書き上げた第一作でした。勢いで書いたので粗も見受けられるかもしれませんが。その勢いは喧嘩っぽく紡がれています。

実際に討論をする際に、情に流されてはいけないのですが、今作では言いがかり的な感じで討論のように

見える言い争いになってます。

その為、主張がぶれたり話が途端に変わったたりとしてみますが、激情の中で戦略を練ろうとしている姿に青春を感じてくれたら幸いです。

さて、ここで表題の話を。何故無意識状態で「ロテ」とか出てくるんだって話ですが、これは私の名前の由来（ツイッターID等）にも関わってきます。

einrotteの「rote」がドイツ語で暴徒、徒党を意味します。一人でも徒党のように大きな影響力を与え、そんな人物になりたいという意味を込めております。

暴れるという意味で思い入れの深い「ロテ」という言葉で書いてみたのが本作です。意味合いもちよつと詳しく述べようと考えましたが蛇足となりそうなのでカットしました。

謎が全部解ける爽快さは勿論好きですが、考察できるのもまた好きなので、幾つかの謎はそのまんまにしておこうかなと。

観念形態ときいて真っ先に出てくるのは哲学、宗教だと思えます。そこには一つの考え方があり、さらに広げた解釈と意味が補強ないしは改変していきます。

でも人それぞれに考え方は持ち合わせております。その十人十色を周囲の環境に左右され易い敏感な高校生・思春期に触れさせる事で、

何か大切なものを得てくれるのではないかなと考えております。

それが何なのかはも人それぞれ。でもそれはきつと『夢』に纏わるものだと私は願っております。

それではこの辺でお開きにしたいと思います。ありがとうございました。